## 第三話　朝ごはん

『のら』はまだ布団から出てこない。すでに『マナ』は先ほどの蹴りで目を覚ましていた。『マナ』は布団から出て、『のら』の前に立ち、「ひとの布団に入って寝るんじゃない」と言って、『のら』を踏みつけた。「ミャー、ミャー」と『のら』が鳴く。『マナ』は「こいつは猫か」と言いつつ更に踏み続ける。さすがの『のら』も起き上がり、「痛い。痛い。『マナ』の布団は暖かいの。気持ち良いの」と言って布団をさする。『マナ』は厳しい顔で「朝だぞ」と言って台所を指差した。

『のら』の朝ごはん簡単である。猫飯やぶっ掛けご飯である。たまに副菜が食卓に並ぶが、賞味期限が切れていることが多い。『のら』は賞味期限を気にしない。匂いで賞味期限を見極める。たまに少し匂いがおかしい時は、黙って『マナ』に毒味をさせている。『のら』の生活の知恵なのか、それとも大雑把なのか、どちらにしろあまり細かいことを気にしない『のら』であった。しかしすぐにお腹をこわす『マナ』には迷惑な話である。最近は『マナ』も慣れてきたのか、賞味期限を確認し怪しいものは食べないようにしているようである。今朝も『マナ』はじっと食事を見て、匂いを嗅いでいる。それを見た『のら』は不気味に「ニ」と笑った。それを見た『マナ』も「ニ」と笑い返し、「これ古いだろ」と言う。『のら』は黙って首を横に振った。

『マナ』は仕事に出かける前に、『のら』の様子をうかがうと布団で丸くなっていた。『マナ』は「字の読み書きができなくちゃ、仕事は出来ないか」とポツリと言った。しかし最初から知らないのか、記憶を無くしたからなのか、『マナ』にも良くわからなかった。